

1915-1945年の毛皮産業による 移入動物と在来種の転地飼育

宇仁義和（東京農業大学）

Introduced animals and transfer of native animals by fur industry around Japan, 1915-1945
Yoshikazu UNI (Tokyo University of Agriculture) unisan@m5.dion.ne.jp

背景

毛皮産業による移入種は外来種問題として認識される一方、在来種の転地飼育は関心が薄い。飼育場での逃走は確実に発生しており、在来の個体群への侵入の可能性を知るには、時系列的な把握、導入個体の来歴や飼育場の設備や管理方法など質的な考察が欠かせない。

方法

1930-1945年の状況について、府県統計や業界雑誌、地域資料から毛皮獣の飼育状況や輸入、移動について数量と経路を調べた。とくに狐と狸については、1938-1941年代の状況を地図に示した。



岡山県養狸協会 浅口郡里庄 昭和12年年賀はがき

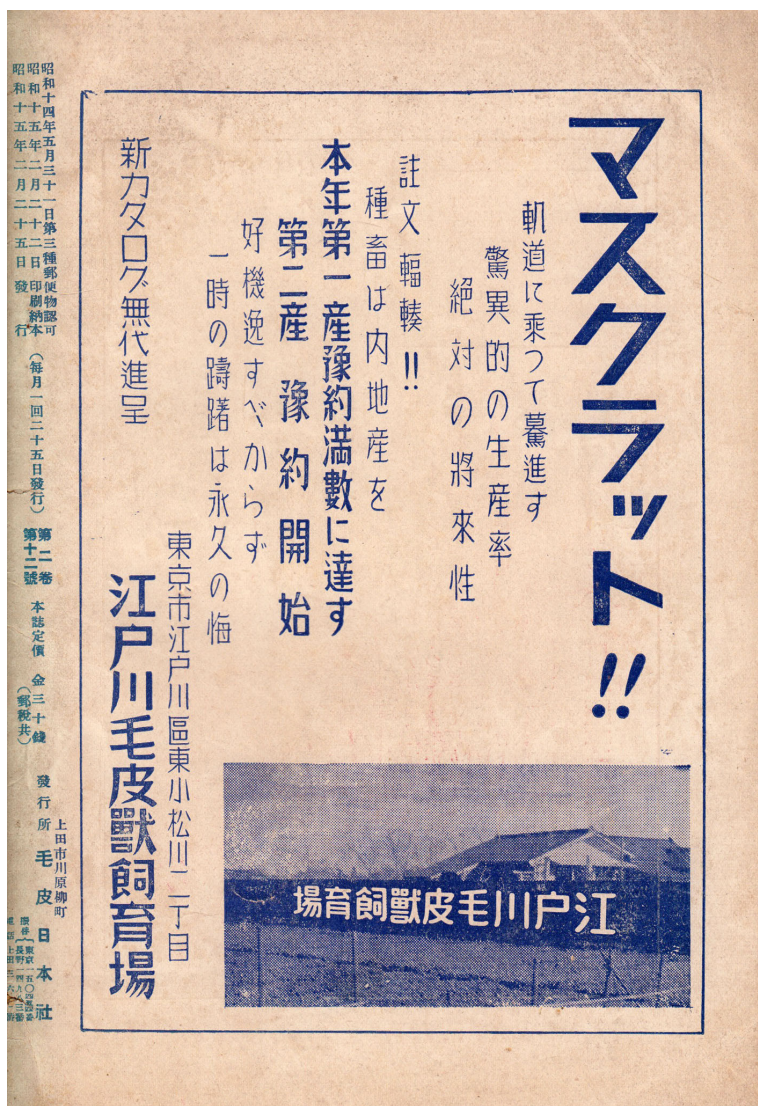
本州産狸が北海道へ集められ、「エゾ狸」に化け本州に養狸家に販売された

狸 たぬき

狐に比べ産業化が進まず、個人レベルでの飼育が多かった。飼育地域は偏りがあり、福島、新潟、岡山県で飼育が多く、その県内でも飼育家は福島県伊達郡、岡山県上房郡や浅口郡など特定の地域に集中した。毛皮は北海道産のものが高価で取引され、本州でも北海道からエゾ狸を仕入れて飼育した。本州産個体を北海道に移動し、エゾ狸と偽り本州の飼育家に販売した例もある。1940年には毛皮価格が暴落した。

マスカラット

1940年の雑誌の裏表紙に広告が現れる。福島県飯坂温泉のヤマキ毛皮獣種畜場が本邦最大の養殖場と広告。



毛皮日本 1940 年 3 月号裏表紙

ヌートリア

1942年の記録では飼育数は全国で1427頭にとどまり、多い府県は順に大阪、静岡、奈良、香川であった。福島県飯坂温泉のヤマキ毛皮獣種畜場が本邦最大の養殖場と広告。



ヌートリアと鯉の飼育場 浜名湖 徳田勝彦氏

寺田資料

寺田弘 1933-2003 が収集した毛皮関連の出版物や新聞の切り抜きであり、なかでも農林省囑託として毛皮事業を展開した三島康七 1906-1986 の著作や写真が貴重である。

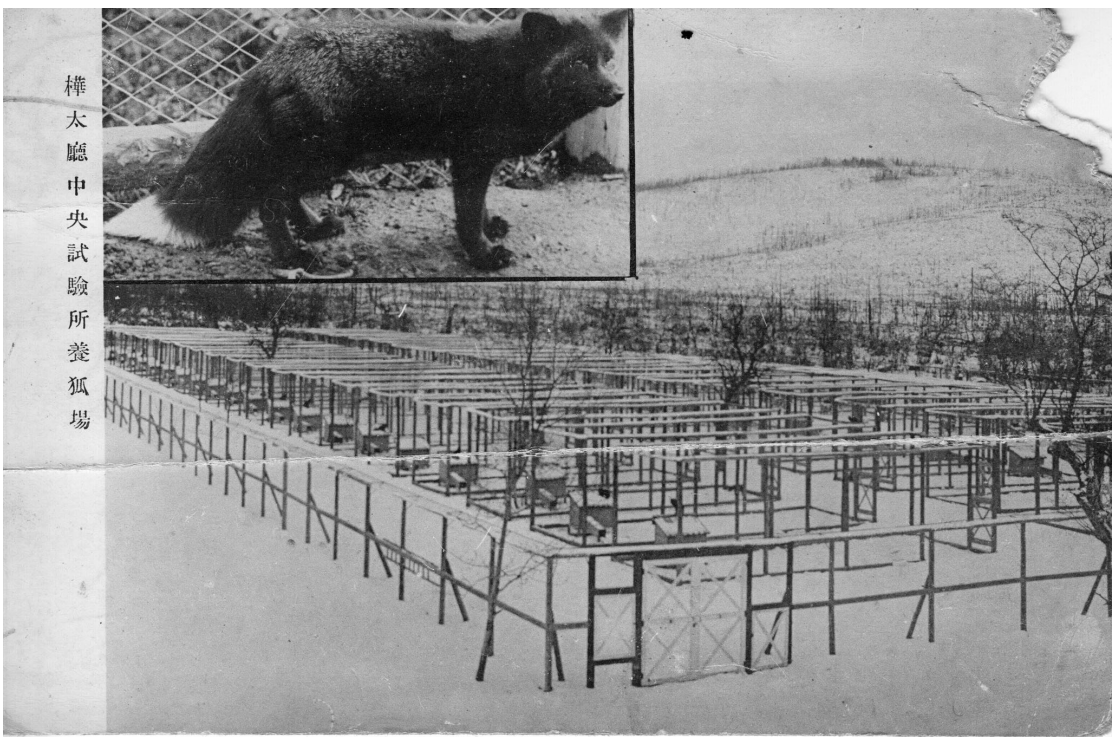


資料を用いた調査や研究を募集しています。海外や戦後の資料も豊富で、おそらく国内最大の文献コレクション。場所は北海道の網走です。資料整理も歓迎です。

鼬 貂 ミンク

鼬の飼育は1938年2月に全国で148事業場が記録されている。頭数は千頭余りで少ない。フィツチと称したドイツ貂やミンクの飼育も始まっていた。

JSPS 科学研究費補助金「鳥獣と家畜のあいだ—近代日本の毛皮産業と牽引力」（基盤研究 C: 2018-2020、課題番号 18K00266）



樺太庁中央試験所養狐場の絵はがき

狐 きつね

日本での産業化は渡瀬庄三郎の進言による。樺太庁や農林省中部千島開発事業など省庁主導で飼育が始まった。樺太と北海道が主産地で、1938年では両者で約9割を生産し、次いで群馬3.9%、福島1.5%だった。本州での養狐事業は寒冷地が中心で、群馬県吾妻郡の北軽井沢では10件以上の養狐場ができた。海外からは銀狐や黒狐はおもにカナダのプリンスエドワード島からの個体が輸入され、養狐場では種雄を1-2頭導入した。

カナダのプリンスエドワード島から銀狐や黒狐が輸入頒布された



北海道の養狐場のパンフレット (1935)

兎 うさぎ

毛皮獣で唯一府県統計に表れる。記録は1926（大正15／昭和元）年に始まり、戦後数年まで。軍需品として知られるが、不況下の農家救済策の副業として農林省が奨励した。



北海道家兎研究所の要覧より

結論と考察

キツネについて、毛皮産業による外国個体の導入は、1910年代後半から樺太と北海道で始まり、1930年代には本州でも局所的に見られた。群馬県や長野県の県境付近での影響が懸念される。タヌキについては、飼養家間での個体のやりとり、とくにエゾタヌキやその偽物としてのホンドタヌキの北海道飼育個体の本州への持ち込みが目立つ。養狸場の分布から影響は全国的であり、とくに多数飼育地域が心配である。